

岡山歴史研究会設立の3年

平成24年5月2日 副会長 山崎泰二

設立前夜

岡山歴史研究会の設立総会は平成22年の秋(2010.10.14)、後楽園の鶴鳴館で会員127名、運営委員15名、顧問25名で挙行された。これに先立つ3月、竹本氏(天野氏の実姉)の仲立ちで全国歴史研究会本部役員3名と天野・山本氏が始めて面談した。そして6月、「歴史を楽しむ会 in 岡山」(32名参加)を企画。鬼ノ城を取り上げ、講演と探訪を実施した。その後、有志8名が設立準備会を結成し、会合(合計10回)を重ね、やっとの思いで設立総会に漕ぎ着けた。

参加人員が皆目見当がつかない中、会場の設定、記念講演のテーマ、講師の選定、運営スタッフの確保が当面の課題だった。その頃からすでに1年後の全国大会を岡山でとの論議がとりざたされていた。200名を超える県外者を迎えるの全国大会は、素人の我々が今から準備しても大変なこととの考え方が支配的だった。しかし私は開催地の地元実行委員会は臨時的受け皿団体ではなく、将来に繋ぎうる団体を立上げ、その団体が現地の実行部隊になるべきと主張した。全国大会開催は絶好のチャンスと考えたのである。議論も出尽くした頃の最終場面では方針、方向を決めることが重要との認識が優勢になった。中心人物の天野氏にも賛同を得て私の主張、方向で進めることに決まった。

設立に当って賛同者(会員)をどのように増やすかが大きな課題となった。準備会のメンバーの人脈には限りがある。私達が立ち上がった当初、心ある仲間からは岡山の歴史系風土では多くある団体に押しつぶされ「労多く益は少ない」との忠告も受けた。岡山には岡大を中心に考古学研究会なる学術団体が全国に発信している。そうしたプロの先生方が主宰されている会も多い。それ以上にセミプロの歴史家を自認する活動団体も多い。歴史の認識は考古から民俗学まで幅が広い。我々の歴史研究会では此れだけ多士済々の皆様を纏めることは不可能である。そこで、纏めようとしないうこと、「専門家と一般人との繋ぎ役に徹する」こと、「既存の各専門分野の活動を尊重」することの想いを貫く姿勢を打ち出した。それらの団体やグループの活動家に「設立発起人」に成って頂く策が頭に浮かんだ。設立発起人の筆頭に柴田一先生や出宮徳尚氏に近い天野氏の働きがあり、在野で活動している佐藤光範氏や野崎豊氏に先ず仲間に入って頂いた。そして主な団体からその中心的な活動家26名に発起人としての賛同を呼びかけ、進めていった。

設立総会と23年度定期総会

設立総会では121名(会員191名)が出席した。設立発起人は全員顧問として就任戴き、この会の指導的立場で支えて頂くことになった。会場は後楽園の鶴鳴館。和室であれば参加者の増減にうまく対応できる。費用も格安で眺望も良い。基調講演のテーマ「後楽園の魅力」とも合致する。講師は臼井洋輔先生。先生は元県立博物館の副館長で中世が専門、氏の引率での園内散策に多くの参加者があり好評であった。司会は稲見圭紅氏で私のエコ研仲間であり気持ち良く引き受けて頂いた。彼女は現在運営委員として活躍している。天野氏を会長に私と本松氏が副会長、天野氏の身内で当初から関わりのある山本氏が事務局長となり、体制も整った。会員191名という予想以上(私は想定内)のスタートとなった。

設立から半年後に23年度の定期総会。今度は会員230名が入る会場が必要。天野会長の提案で

山陽新聞社のさん太ホールにすることにした。何度かこの新しいホールを利用しているが、企画者の立場で携わった経験は無い。300名収容と聞いていたので会員の6割とプラスアルファの一般参加で200名になれば上出来と踏んだ。全国大会の予行演習と位置付けて企画した。テーマも講師も順調に決まった。天野会長の出番の演出が肝要と私は考えた。彼の一番得意とする分野のテーマでコーディネーターとして仕切ることで一般参加者や会員にその存在感をアピールすることを考えた。彼が岡山市役所のトップの一員として岡山城築城400年祭を仕切った時の人脈と経験を生かすことである。戦国末期から岡山藩の初期の礎を築いた時代設定で、岡山市文化財課の乗岡実課長、県郷土文化財団の万城あき女史、清水宗治の末裔の清水男氏、宇喜多秀家が関が原での負け戦で助けられた恩義のある矢野一族の末裔をパネラーとして招聘できた。会場には192名の参加者があり当初の目論見は達成できた。

全国歴史研究会第27回全国大会 吉備の国 岡山大会

22年度の全国大会は和歌山。私は大名庭園サミットで高松に行き、本松、山本氏らは、桃太郎の衣装をまもって参加し、全国大会を経験して帰って来た。地元実行委員会は岡山歴史研究会の運営委員会がそのまま移行した。後に本部から「岡山方式」と称される民間だけの手作り実行委員会である。三役の役割分担を①講師・案内・ガイド集などの分野は私の担当、②当日前後の運営の現場は本松氏、③本部との渉外、経費は山本氏とした。来賓・統括折衝は天野会長の役である。

まず、見学する訪問先のガイド集のたたき台の作成に着手した。古墳から刀剣・陶器・近代農業遺産・後樂園から岡山城まで幅広い分野が対象である。専門家に執筆を依頼すれば多くの先生方をお願いせねばならず費用もかかる。そこで浅学も承知の上で恥じも学びの一つとの認識で挑戦することにした。夏の暑い中、A4で約20ページになる原稿を一气呵成に纏め上げた。概論は天野会長にお願いし、写真や地図の挿入等は山本氏がパソコンの腕を貸してくれ三名の労作になった。これをたたき台として顧問の皆さんや運営委員の多くの方に添削助言をお願いした。佐藤顧問からは丁寧なアドバイスを戴いた。楠氏は理系の論理派として筋が通った文章に添削してくれ、うまく仕上がった。彼もエコ研の仲間である。山本事務局長が柴田顧問へ相談に伺った時「山崎氏はどこの先生ですか？」と問われたことを、私に伝えてくれた時ほど内心嬉しく思ったことはない。柴田先生は就実大学の前学長であり中世・近世を専門とする著名な学者である。

ともあれ260名の参加者(3日間延べ455名)があり、最近の全国大会では屈指のものになったと本部役員の世辞も含めた評価を戴いた。山本氏を始め多くの仲間と労を多くした甲斐があった。多くの協力者や仲間に謝辞を述べたい。

機関紙は3号まで発行した。私が担当し、能勢初枝さん夫妻との知遇を得たことが多くの進展を得る原動力になった。ホームページの立上げは山本事務局長が担当し今年の3月1日に開設した。活用はこれからである。又、県内歴史関連団体調査も同じく3月1日にスタートした。23年度は全国大会に全力を挙げたが、そのほかに春・秋の探訪会を企画した。春の探訪会は大雨で延期になったが、矢坂山・富山城址を野崎氏の案内で、私が担当して正月あけに実施(参加者65名)した。第一回目となった本松副会長担当の秋の美作の岩屋城跡には65名の参加者があった。

24年度定期総会

24年度の定期総会(参加者246名)では予てより強い思いのある山田方谷を取り上げたかった。天野会長をはじめ三役の賛同を得て取り組むことになった。再来年のNHK大河ドラマに山田方谷

を取り上げる県民運動の構想が地元高梁市以外にも拡がり、東京では全日空大橋会長を中心に盛り上がっていた。岡山では岡山商工会議所を中心に応援連絡会の発足の方向であることを知る。山田方谷に学ぶ会世話人で建築士会の藤井氏を通して企画を依頼した。岡山県の職員を中心にできている「山田方谷に学ぶ会」代表世話人の渡辺氏に相談するとの事である。氏はもと県立美術館の副館長などの県の要職を勤められていた。今は離れているが研究活動は続いていて、若手講師の適任者を推挙できるとの事であった。女性の講師をと望んだらジュエリータナカの常務を推挙された。お会いするととても爽やかで明晰な女性であった。全てを渡辺さんに一任して当日を迎えた。参加した仲間からディスカッションの隠れたテーマである「氣」を選んだパネラー一同に敬意を表すとの声が上がった。また山田方谷の『直養＝唯ひたすらに』の言葉を選んだ講師にも感動したとのコメントも頂いている。

今年の大河ドラマが平清盛であることに因み、当会の会員で女性の講師をと内々探していたら、とても身近な能勢初枝さんが、過去に出版され絶版になっているものが古本屋で高価な値がついて好評との様子。岡山で再版され、その話が急遽まとまった。高槻での講演などの話もあって本人も乗り気であり我々も少し後押しをとの想いで記念講演をお願いした。さん太ホールでの講演が決まると次々に講演の依頼がきた。津山の山城連絡会、ライオンズ、ロータリー等からである。歴史検証もしっかりしていて当時の歴史背景や貴族、皇室の風俗等、識見が話のまにまに出て聴衆を引き付けた。成功だった。

最後に

私は企画力が大切と考えている。タイムリーなテーマを選び、地道な研鑽・研究に光を照射すれば皆さんに喜んで頂ける。良い提案・前向きな提案が次から次に出てきて、あれもしたい此れもしたいとの思いが会員に満ち溢れる限り、岡山歴史研究会の将来は明るいと感じている。岡山歴史研究会発足3年目の定期総会が大成功した節目に私の思いを纏めてみた。

2012. 24. 5. 2

朝一気に書き上げる。 山崎泰二

天野会長・山本事務局長・楠運営委員の丁寧な添削を戴きこの文が完成したことをふきする。